

きずな

学校教育目標「確かな学力と豊かな人間性を備え、
力強く生き抜く生徒の育成」

きき上手になりましょう

「きく」の意味って考えたことはありますか？ ある言語学者の先生は、「きく」とは「**相手の方のじょうほうやおもい、かんがえ**（いろいろな意味が含まれているので、ひらがなになっています）**を、自分なりに受け止め理解すること**」と言われたそうです。そして大事なのは「きく」が終わった後の、「きいた」だとも言われたそうです。「きいた」とは「相手の…理解し、**それを相手の方に確認し、承認を得た状態**」と言われたそうです。

世の中の争いごとは、「言った」「言わない」、「やった」「やってない」、「聞いた」「聞いてない」から起こるものです。そう考えると、何かを聞いたときに「相手の方に確認し、承認を得ること」をすれば、争いごとは起きないですね。

「あなたの話を私はこのように理解しましたが、間違っていないですか？」と**相手に聞いて確認すれば、勘違いや思い込みは生まれません。**



戦前の小学校では、授業の終わりの15分で、その日の授業について、子どもたちが自分の理解した内容を発表していたのだそうです。そのときには、間違っただけでも頭ごなしに否定されたり、バカにされたりということではなく、他の生徒はその意見を一旦受け入れた上で、正しい答えにたどり着くまで一緒

に話し合ったそうです。そうやって話し合うことで、みんなが同じ理解が出来ていたのです。昔のこうした授業、なんだかすごくあったかく、しかも素晴らしく感じませんか。

「きく」には、「聞く」「聴く」「訊く」といろいろな漢字が当てられています。「聞く」は「自然にきこえてくる」、「聴く」は「意識して念入りにきく」そして、「訊く」は、「分からないところや疑問を相手に問いかけたり尋ねてしっかり理解する」という意味があるようです。ぜひ、「訊き上手」になりましょう。

人の関わり

元プロ野球選手の立浪和義さんが、現役時代、難病の子どもを励ますために病院に行ったときのことを次のように話されています。

ただ会うだけで感動してもらえます。『僕の仕事はなんて恵まれているんだ』と思いました。治る見込みは薄くともある男の子は『治ったらナゴヤドームに立浪さんを応援に行きます』と言ったんです。励まされたのは僕の方でした。

病室を後にするとき、立浪さんは不意に涙が流れたそうです。

いろいろな立場で人と人が関わる必要があります。そのとき、人はお互いにその関わりを通して影響を与え、与えられ成長していくものだと思います。

現在コロナ禍のため、そうした関わりがなかなか出来ないのが残念ですが、現在の状況が収まったら、ぜひ、生徒がいろいろな方と関わる機会を作りたいと思います。

今度こそは…

10月16日のカルチャーフェスタ、今度こそ生配信を実現します。本校HPより、ぜひご覧ください。

